

報道関係各位

ポストコロナ・アーツ基金（PCAF）事務局

新しい成長の提起—ポストコロナ社会を創造するアーツプロジェクト ポストコロナ・アーツ基金 参加アーティスト決定



ポストコロナ・アーツ基金実行委員会（事務局：東京都千代田区）は、東京藝術大学との共同事業として、ポストコロナ社会を創造するアーツプロジェクトを進行中です。このたび、本プロジェクトの参加アーティスト17組が決定しましたので、お知らせします。

また、プロジェクトの活動資金である「ポストコロナ・アーツ基金」（PCAF）について、立ち上げ時から寄付等を通じて関わってきたPCAF実行委員（発起人）に続いて、新たにPCAF実行委員 一般会員の募集を開始します。

本プロジェクトは、新型コロナ禍以降の社会的課題と考えられる「新しい成長」に関する価値観・視点を、アーティストとの協働プロジェクトにより創出し、展覧会等で広く社会へ提起する試みです。今後は各アーティストが各々のプロジェクトを提案し、その実施に向けて動き出します。ぜひご注目いただけたら幸いです。また、この試みにご賛同いただける方々は、ぜひPCAF実行委員 一般会員としてのご参加を検討いただければ幸いです。

■参加アーティスト（17組、五十音順）

青柳菜摘、雨宮庸介、池田剛介、遠藤麻衣、大和田俊、小泉明郎、SIDE CORE、サエボーグ、竹内公太、Chim↑Pom、中村裕太、西村雄輔、長谷川愛、布施琳太郎、毛利悠子、百瀬文、柳瀬安里

■選考委員（五十音順）

榎木野衣 美術評論家、多摩美術大学教授
藪前知子 東京都現代美術館学芸員
鷲田めろろ 十和田市現代美術館館長

参加アーティストは、PCAF実行委員会等から推薦され、専門家からなる選考委員会により決定しました。本リリース末尾に各アーティストの略歴と、選考委員コメントをご紹介します。

■PCAF 実行委員 一般会員の募集

本プロジェクトは、その活動資金として、賛同する有志の発起人および一般からの寄付による「ポストコロナ・アーツ基金」(PCAF) を設立しています。今回、立ち上げ時から寄付を通じて関わってきた PCAF 実行委員(発起人)に続き、PCAF 実行委員(一般会員)の募集を開始します。これは同基金への寄付または制作資源のご提供・運営実施ご支援をいただき、作家、実行委員会での交流機会にもご参加いただけるものです。本基金の活動にご賛同いただける方々は、ぜひ参加ご検討ください。

PCAF 実行委員 一般会員の活動概要

1. 寄付または制作資源のご提供・運営実施ご支援

- 寄付手続きは東京藝術大学基金(藝大基金)にて行います。※1
- 1口30万円のご寄付(寄付の全額損金算入など税制上のメリットもあります ※2)
- 制作資源のご提供(プロジェクト実施会場、制作スペース、物品協賛、技術、人的支援等)
- 広報支援など(ウェブサイト、各種メディアでの情報発信)

2. 会員の推薦

よろしければ、他に会員になっていただきたい方を数名ご推薦お願いします。

3. PCAF 実行委員会としての活動(ご希望による)

- ウェブサイト等での名前掲載
- 作家、実行委員会での交流でのイベント、交流会へのご参加

※1 <http://www.fund.geidai.ac.jp/>

※2 <http://www.fund.geidai.ac.jp/donate/#merit>

▶お申込書はPCAFウェブサイト(後述)からダウンロードできます。

■ウェブサイト <https://pcaf.art/> (当サイト)

上述情報の詳細に加え、事業概要、組織概要、プロジェクトの背景と目的、今後のスケジュールなどを掲載しています。今後も随時更新していく予定です。

■本件に関するお問い合わせ先

PCAF 事務局：〒101-0021 東京都千代田区外神田 6-11-14 210 号室 コマンドN内

担当者：宍戸

TEL：03-3518-9101 Email：contact@pcaf.art

ウェブサイト：<https://pcaf.art/>

資料1 PCAF 参加アーティスト (17組、五十音順)



青柳 菜摘

Natsumi Aoyagi

Photo by Shintaro Wada



【参考作品】《彼女の権利—フランケンシュタインによるトルコ人、あるいは現代のプロメテウス》2019年 展示風景 Photo by Shintaro Wada

1990年東京都生まれ。ある虫や身近な人、植物、景観に至るまであらゆるものの成長過程を観察する上で、記録メディアや固有の媒体に捉われずにいかに表現することが可能か。リサーチやフィールドワークを重ねながら、作者である自身の見ているものがそのまま表れているように経験させる手段と、観者がその不可能性に気づくことを主題として取り組んでいる。近年の活動に「青柳菜摘 + 佐藤朋子『TWO PRIVATE ROOMS - 往復朗読』」(theca、東京、2020年)、「オープン・スペース 2019 別の見方で」展参加 (NTT インターコミュニケーション・センター [ICC]、東京、2019年)、個展「富士日記」(NADiff Gallery、2016年)、「第10回 恵比寿映像祭」参加 (東京都写真美術館、2018年) など。また書籍に小説『黒い土の時間』(自家版、2017年) などがある。プラクティショナー・コレクティブである「コ本や honkbooks」主宰。「だつお」というアーティスト名でも活動。



雨宮 庸介

Yosuke Anemiya

Photo by Kiichi Kawamura



【参考作品】《りんごと手》2018年、林檎(木材に油彩)、人間の左手、大理石、ステンレス 個展「あ、あな、あなた」展示風景、ARTS ISOZAKI、茨城、2018年 Photo by Kenji Otani

1975年茨城県生まれ。ベルリン/東京在住。Sandberg Institute (アムステルダム) Fine Art Course 修士課程修了。ドローイング、彫刻、パフォーマンスなど多岐にわたるメディウムによって作品を制作。「六本木クロッシング 2010 展: 芸術は可能か?」(森美術館、2010年)、「Wiesbaden Biennale 2018」(ヴィースバーデン市内各所、2018年)、「DOMANI・明日展」(国立新美術館、2018年) 等では長期にわたる会期の全開館時間に在廊し、パフォーマンスを行なった。「国東半島芸術祭」(2014年)への参加を機に2014-3314年のプロジェクト「[1300年持ち歩かれた、なんでもない石](#)」を開始。リンゴや石や人間などのありふれたモチーフを扱いながら、その超絶技巧や話法により、いつのまにかに違う位相の現実を身置かれてしまう——体験の提供により「現代」と「美術」について再考をうながす作品を制作している。



池田 剛介

Kosuke Ikeda



【参考作品】《モノの占拠》京都芸術センター、2016年 Photo by 木奥恵三

1980年福岡県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。モノや絵画をめぐる関心を軸に制作やプロジェクトを行う一方、批評誌などでの執筆を手がけている。主な個展に「現象と干渉」(MEDIASHOP | gallery、京都、2019年)、「モノの生態系」(絶対空間、台南、台湾、2015年)、「メルボルン芸術発電所」(RMIT PROJECT SPACE、メルボルン、オーストラリア、2013年) など。主なグループ展に「Malformed Objects」(山本現代、東京、2017年)、「Regeneration Movement」(国立台湾美術館、台中、2016年)、「あいちトリエンナーレ 2013」(愛知、2013)、「東京芸術発電所」(東京藝術大学、2011年) など。主なプロジェクトに「モノと占拠」(京都市立芸術大学、2018年)、「モノの占拠」(京都芸術センター、2016年) など。著書に『失われたモノを求めて 不確かさの時代と芸術』(夕書房、2019年)。2019年より京都にてアートスペース「浄土複合」をディレクション。



遠藤 麻衣

Mai Endo

1984 年生まれ。2016 年より東京芸術大学美術研究科博士後期課程美術専攻油画（壁画）研究領域在籍。主な展覧会として、「彼女たちは歌う」（東京芸術大学大学美術館 陳列館、2020 年）、「新水晶宮」（Talion Gallery、東京 / VOU、京都、2020 年）、「When It Waxes and Wanes」（VBKÖ、ウィーン、オーストリア、2020 年）、「アイ・アム・ノット・フェミニスト!」（ゲーテ・インスティテュート東京、2017 年）などがある。パフォーマーとして小林勇輝「Still live」（ゲーテ・インスティテュート東京、2019 年）、俳優として指輪ホテル「バタイユのバスローブ」（naebono art studio、札幌 / BUoY、東京、2019 年）に出演。2018 年に丸山美佳と「Multiple Spirits（マルスピ）」を創刊。主なエッセイに「毛むくじらの山」（蜘蛛と箒『原稿集』、2020 年）など。



【参考作品】《蛇に似る04:たまご丸》2020 年
Photo by 松尾宇人



大和田 俊

Shun Owada

1985 年栃木県生まれ。現在、東京を拠点に活動。音響と、生物としてのヒトの身体や知覚、環境との関わりに関心を持ちながら、電子音響作品やインスタレーションの制作を行なっている。東京芸術大学音楽学部卒業、同大学院美術研究科修了。近年の主な個展に、「破裂 OK ひろがり」（小山市立車屋美術館、栃木、2020 年）、「大和田俊 | unearth」（ボルボ スタジオ 青山、東京、2017 年）、「Paleo-Pacific」（トーキョーワンダーサイト本郷、東京、2016 年）、「unearth」（NTT インターコミュニケーションセンター、東京、2015 年）など。同、参加グループ展やフェスティバルには「WRO Biennale」（National Museum in Wroclaw、ヴロツワフ、ポーランド、2019 年）、「Ars Electronica 2018」（POSTCITY、リンツ、オーストリア、2018 年）、「不純物と免疫」（トーキョーアーツアンドスペース本郷、東京、2017 年）、「裏声で歌へ」（小山市立車屋美術館、栃木、2017 年）などがある。



【参考作品】《unearth》2017 年「裏声で歌へ」展での展示風景、小山市立車屋美術館、栃木、2017 年
Photo by 富田了平



小泉 明郎

Meiro Koizumi

1976 年群馬県生まれ。チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン（ロンドン）にて映像表現を学ぶ。現在は国内外で滞在制作し映像やパフォーマンスによる作品を発表している。「あいちトリエンナーレ 2019 情の時代」（愛知県美術館／愛知芸術文化センター、2019 年）、「第 14 回シャルジャビエンナーレ」（シャルジャ美術館、アラブ首長国連邦、2019 年）、個展「Battle lands」（マイアミ・ペレス美術館、マイアミ、2018 年）他、国内外の展覧会・国際展に多数参加。主な受賞歴に「Artes Mundi 9」ファイナリスト・ノミネート、「第 30 回タカシマヤ文化基金タカシマヤ美術賞」。作品は、東京国立近代美術館、国立国際美術館（大阪）、テート・モダン（ロンドン）やニューヨーク近代美術館など多くの美術館に収蔵されている。

Photo by Matadero Madrid
/ Photo by Bego Solis



【参考作品】《証言の天使たち》2019 年、ビデオ・インスタレーション Courtesy of the artist, Annet Gelink Gallery and MUJIN-TO Production



Photo by 濱田 晋

SIDE CORE



Photo by 前谷 開

2012年より活動開始。メンバーは高須咲恵、松下徹、西広太志。ストリートカルチャーを切り口にアートプロジェクトを展開。「風景にノイズを起こす」をテーマに、都市や地域でのリサーチをベースにアクションを伴った作品を制作。ギャラリーや美術館での展覧会開催の他に、壁画プロジェクトや街を探索する「ナイトウォーク」など野外空間での活動を展開。全てのプロジェクトは公共空間での視点や思考を転換させ、表現や行動を拡張することを目的としている。主な参加展覧会に「大京都芸術祭」（京丹後、京都、2020年）、「生きている東京展」（ワタリウム美術館、東京、2020年）、オンライン展「Out of Blueprints by Serpentine Galleries」（NOWNESS、2020年 ※EVERYDAY HOLIDAY SQUAD としての出展）。



Photo by ZIGEN

サエボーグ

Saeborg



【参考作品】《SAEBORG LAND》2019年「DARK MOFO」でのパフォーマンス、Avalon Theatre/MONA、ホバート、オーストラリア、2019年 Photo: DARK MOFO 2019

1981年富山県生まれ。東京都拠点。サエボーグはラテックス製の着ぐるみ（スーツ）を自作し、自ら装着するパフォーマンスを展開するアーティスト。これまでの全作品は、東京のフェティッシュパーティー「Department-H」で初演された後、国内外の国際展や美術館で発表されている。2014年に岡本太郎現代芸術賞にて岡本敏子賞を受賞。主な参加展覧会に「第6回アテネ・ビエンナーレ」（Banakeios Library、ギリシャ、2018年）、「DARK MOFO」（Avalon Theatre/MONA、ホバート、オーストラリア、2019年）、「あいちトリエンナーレ」（愛知県芸術劇場、2019年）、「Slaughterhouse17」（Match Gallery/MGML、リュブリャナ、スロベニア、2019年）、「Cycle of L」（高知県美術館、2020年）など。



竹内 公太

Kota Takeuchi



【参考作品】《文書 1: 王冠と身体》2020年、インスタレーション、コピー紙にレーザープリント Courtesy of SNOW Contemporary

1982年生まれ。福島県帰還困難区域内の展覧会「[Don't Follow the Wind](#)」実行委員。東京電力福島第一原発ライブカメラの「指差し作業員」の代理人。パラレルな身体と憑依をテーマに、映像・写真のインスタレーション等を制作。失われた歴史の痕跡を辿り、隔絶された土地で協働しながら、メディアと人の関係を探る。2020年個展「[Body is not Antibody](#)」（SNOW Contemporary、東京）にて、パンデミックにおける国家／身体イメージについてのインスタレーションを発表。



Photo by 山口聖巴

Chim ↑ Pom

卯城竜太・林靖高・エリイ・岡田将孝・稲岡求・水野俊紀により、2005年に東京で結成されたアーティストコレクティブ。時代のリアルを追究し、現代社会に全力で介入したクリティカルな作品を次々と発表。世界中の展覧会に参加するだけでなく、独自でさまざまなプロジェクトを展開する。東京電力福島第一原発事故による帰還困難区域内で、封鎖が解除されるまで「観に行くことができない」国際展「Don't Follow the Wind」(2015年-)の発案と立ち上げを行い、作家としても参加している。現在は新宿の「ホワイトハウス」を拠点に活動。そのプロジェクトベースの作品は、日本の美術館だけでなくグッゲンハイム美術館(ニューヨーク)、ポンピドゥ・センター(パリ)などにコレクションされ、アジアを代表するコレクティブとして時代を切り開く活動を展開中。



【参考作品】《A Drunk Pandemic》2019年 Photo: Michael Pollard Courtesy of the artist, ANOMALY and MUJIN-TO Production



中村 裕太

Yuta Nakamura

Photo by 表 恒匡

1983年東京生まれ、京都在住。京都精華大学芸術学部特任講師。2011年京都精華大学芸術研究科博士後期課程修了。博士(芸術)。(民俗と建築にまつわる工芸)という視点から陶磁器やタイルなどの学術研究と作品制作を行なう。近年の展示に「六本木クロッシング 2013:アウト・オブ・ダウトー来たるべき風景のために」(森美術館、東京、2013年)、「第8回アジア・パシフィック・トリエンナーレ」(クイーンズランド・アートギャラリー、ブリスベン、2015年)、「第20回シドニー・ビエンナーレ」(キャレτζワークス、2016年)、「あいちトリエンナーレ」(愛知県美術館、2016年)、「柳まつり小柳まつり」(ギャラリー小柳、東京、2017年)、「MAMリサーチ 007: 走泥社-現代陶芸のはじまりに」(森美術館、東京、2019年)、「表現の生態系:世界との関係をつくりかえる」(アーツ前橋、群馬、2019年)など。著書に『アウト・オブ・民藝』(共著、誠光社、2019年)。



【参考作品】《群馬工芸の生態系》2019年「表現の生態系:世界との関係をつくりかえる」展での会場風景、アーツ前橋、群馬、2019年 Photo by 表 恒匡



西村 雄輔

Yusuke Nishimura



【参考作品】《yamaji orimono*works》

1976年福岡生まれ。2001年に東京藝術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻油画修了。2003年より群馬県桐生市の産業遺産である旧織物工場の改修/修繕プロジェクトを手がける。Moriyoshi Reconstruction Project(2003~2004年、旧森山芳平織物工場)、現在長期に渡り進行中のYAMAJIORIMONO*WORKS(山治織物工場、2006年~)では、傷んだ木造の建物に工場主とともに実際に手を入れながら、その場所と対話し、ものが語る歴史を読み、今を生きる場をつくる行為の在り方を提示している。



長谷川 愛

Ai Hasegawa



【参考作品】《Human X Shark》2017年、リサーチ・プロジェクト

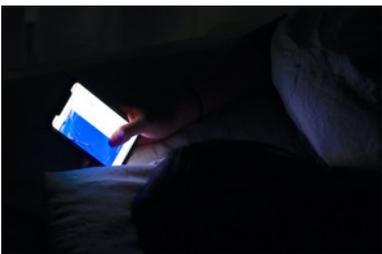
アーティスト、デザイナー。バイオアートやスペキュラティブ・デザイン、デザイン・フィクション等の手法によって、生物学的課題や科学技術の進歩をモチーフに、現代社会に潜む諸問題を掘り出す作品を発表している。IAMAS 卒業後渡英。2012年英国 Royal College of ArtにてMA修士取得。2014年から2016年秋まで MIT Media Labにて研究員、MS修士取得。2017年から2020まで東京大学 特任研究員。2019年から早稲田大学非常勤講師。2020年から自治医科大学と京都工芸繊維大学にて特任研究員。「(不)可能な子供/(im)possible baby」が第19回文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞。森美術館、アルスエレクトロニカ等、国内外で多数展示。著書に「20XX年の革命家になるには——スペキュラティブ・デザインの授業」(ビー・エヌ・エヌ新社、2020年)がある。



布施 琳太郎

Rintaro Fuse

Photo by 梅沢和木



【参考作品】《隔離式濃厚接触室》2020年、ウェブページ Photo by 竹久直樹

1994年生まれ。2017年東京藝術大学美術学部絵画科(油画専攻)卒業。現在は同大学大学院映像研究科後期博士課程(映像メディア学)に在籍。洞窟壁画をはじめとした先史美術についてのリサーチとiPhoneの発売以降の社会の分析を下敷きに、絵画やインスタレーションなどの作品制作、展覧会の企画、運営、キュレーション、そしてテキストの執筆を行っている。主な展覧会企画に「iphone mural (iPhoneの洞窟壁画)」(BLOCK HOUSE、東京、2016年)、「新しい孤独」(コ本や、東京、2017年)、「ソラリスの酒場」(the Cave/Bar333、神奈川、2018年)、「The Walking Eye」(横浜赤レンガ倉庫、神奈川、2019年)、「余白/Marginalia」(SNOW Contemporary、東京、2020)、「[隔離式濃厚接触室](#)」(ウェブページ、2020年)など。



毛利 悠子

Yuko Mohri

Photo by 前田直子



【参考作品】《モレモレ: 与えられた落水》2015年—木材、傘、ホース、ペットボトル、ゴム手袋、バケツ、ホイール、雑巾、スポンジ、アクリル樹脂など 272.5 x 175.8 x 50 cm (x 3) Photo by Blaise Adilon, Biennale de Lyon, 2017

1980年神奈川県生まれ。東京在住。磁力や重力、風や光など、目に見えず、触れることもできない力と、日常のありふれた素材との出会いが生む表情にフォーカスしたインスタレーションを制作。主な個展に、「毛利悠子: ただし抵抗はあるものとする」(十和田市現代美術館、2018年)、「Voluta」(カムデン・アーツ・センター、ロンドン、2018年)。ほか、「ウルル・インダストリアル・ビエンナーレ」(エカテリンブルク、ロシア、2019年)、「アジア・パシフィック・トライアニュアル2018」(ブリスベン、オーストラリア、2018年)、「リヨン・ビエンナーレ2017」(フランス、2017年)、「コーチ=ムジリス・ビエンナーレ2016」(インド、2016年)など、国内外のグループ展への参加多数。2015年に日産アートアワードグランプリ、2016年に神奈川文化賞未来賞、2017年に第67回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。



百瀬 文

Aya Momose

1988年東京生まれ。近年の主な個展に「I. C. A. N. S. E. E. Y. O. U」(EFAG、東京、2019年)、「サンプルボイス」(横浜美術館アートギャラリー1、神奈川、2014年)、主なグループ展に「彼女たちは歌う」(東京藝術大学 美術館陳列館、2020年)、「六本木クロッシング 2016 展：僕の身体、あなたの声」(森美術館、東京、2016年)、「アーティスト・ファイル 2015 隣の部屋——日本と韓国の作家たち」(国立新美術館、韓国国立現代美術館、東京、2015-16年)など。2016年度アジアン・カルチュラル・カウンシルの助成を受けニューヨーク (Triangle Residency) に、その後ソウル (SeMAレジデンス) に滞在。2019年、イム・フンスン氏と共同制作した《交換日記》が全州国際映画祭 (JIFF) に正式招待される。



【参考作品】《Social Dance》2019年、シングルチャンネル・ビデオ、10分33秒



柳瀬 安里

Anri Yanase

1993年埼玉県生まれ。2016年京都造形芸術大学美術工芸学科現代美術・写真コース卒業。身の回りの出来事を出発点とし、それが何なのかを考えるため、知るためのひとつの方法として作品を制作している。知ったかぶりすることなく反応することを大切にしたいと思っている。近年の参加展に、『Oh! マツリ☆ゴト 昭和・平成のヒーロー&ピーポー』(兵庫県立美術館、2019年)、『Gallery selection: Video works』(ギャラリー小柳、東京、2019年)、「ニューミュレーション#3 菊池和晃・黒川岳・柳瀬安里」(京都芸術センター、2020年)などがある。



【参考作品】《光のない。一わたしの立っているところから》

資料2 選考委員のコメント

榎木野衣(美術評論家、多摩美術大学教授)

現在、私たちが直面している異常な事態は、かりに新型コロナウイルス感染症が収束したとしても、根本的に解決されるものではない。現在の世界を支えるシステムそのものが、未知のウイルスに、これ以上ない格好の触媒を提供し続けているからだ。としたら、私たちはいま、ひとつのパンデミックのもとで第一波、第二波のような呼び方をすればいい。より長期的には、さらに異質なウイルスによる別のパンデミックが、ずっと大きな波（メガ・ウェイヴ？）として、第一波、第二波のように到来すると考えたほうがいい。そのようななかで、私たちはいったい、どのような未来を想定すればよいのだろうか。けれども、このようなことになるはるか前から、そのような思考実験こそ、アーティストたちの原動力ではなかったか。そんなことを念頭に置きながら、選考に臨んだ。

藪前知子(東京都現代美術館学芸員)

新型コロナウイルスの芸術生産の現場への影響は深刻であり、これを機に活動をやめざるを得なかった人たちは夥しい数に上るだろう。そのことは胸に留めておかななくてはならない。一方で、この状況に対して、抵抗としてのアートの真価を問うべく立ち上がったのがこのプロジェクトだ。立ち上げた推薦委員が選んだ候補作家から、この状況に対するアクションを期待する作家を選考させていただいた。他者による当事者の表象の是非が問われた東日本大震災と異なり、この状況においては誰もが当事者である。客体化できない、表象できない何かについて、私たちは思考を続けなくてはならないだろう。芸術は常に時代を超えて、硬直した社会に別の可能性を示してきた。彼らの作品を通して、他者との新しい共有のプラットフォームが形作られるのを期待したい。

鷲田めるろ(十和田市現代美術館館長)

新型コロナウイルス感染症により社会は大きく変化した。それは今も進行中で、先を見通すことができない。自らの表現様式を確立している作家よりも、状況に対して柔軟に反応できる作家を選んだ。新型ウイルスの出現は大きくは人間と自然との関係の変化に起因し、気候変動などの環境問題とも関連する。自然との関わり方について視野を広げてくれる作家も重視した。他方、個人的な経験から作品を立ち上げるような作家も候補者リストに含めた。コロナ禍は全世界的な現象でありつつも、各人の置かれた状況により、その経験は大きく異なるからだ。なお、十分な実力があっても他で発表の機会が多くある作家よりも、若手の作家を積極的に評価した。